国際交流基金日本語教育紀要
第19号（2023年）
〔報告〕

教師養成研修のインストラクターになることに対する意識調査

大日方春菜・松田涼子

1. はじめに

1.1 報告の概要

フィリピンでは、2009年より一部の公立学校で中等教育課程における第二外国語教育としての日本語教育（The Course on Japan for High School Classroom Instruction：以下、CJH[1]）が導入されている。それに伴い、国際交流基金マニラ日本文化センター（以下、JFM）は、教材の作成や中等教育課程の教師に対する日本語教師養成研修（以下、日本語教師養成研修）を実施している。日本語教師養成研修には、フィリピンの中等教育で使用されている教材の指針、学習項目や教授法等を学ぶパート（以下、教授法パート）と教師自身が日本語学習を行うパート（以下、日本語パート）の2つがある。そのうち、教授法パートは、CJH教師の中から日本語教育に対する積極性や日本語力を考慮しJFMが推薦し、インストラクター養成研修（以下、インストラクター研修）を修了した者（以下、インストラクター）が講義を担当している。本稿では、インストラクター研修に参加するインストラクター候補者を対象に実施したインタビュー調査について報告する。

1.2 調査の背景と目的

JFMは、インストラクター研修を過去3回実施してきたが、数年でインストラクター業務を辞めてしまう人が多いという課題を抱えていた。インストラクター業務の継続が困難になった理由としては、学校の業務が多忙になったことや、昇進、転職、結婚・出産などの状況や環境の変化があげられている。ただし、昇進や出産に際して、一時的にインストラクター業務を中断したが、その後状況が変化したことで、現在は復帰し、継続して活動しているインストラクターもいる。また、これらの理由のほかに、一部の元インストラクターからは「教師に対して教える自信がない」などの声も聞かれ、インストラクター業務に対する不安や精神的負担、思い描いていたイメージとの齟齬を持つ者がいることが分かった。不安を抱えたまま活動を開始してしまうと、途中で活動を辞めてしまうだけではなく、復帰も難しくなると考えられるため、インストラクター候補者がインストラクター研修や業務に対してどのような意識を持っているのかを明らかにすることが重要である。

先行研究では、日本人か外国人かを問わず、日本語教師に対する意識調査が多く見られる。西谷（2013）では、先行研究とインタビュー調査を基に不安尺度を作成し、外国人日本語教師の不安の構造を明らかにしている。また、布施（2020）では、初任日本人日本語教師に対して、日本語を教えることについての不安、心配などについての調査が行われている。一方で、教師養成研修などを担当するインストラクター養成については、Evi 他（2013）で、研修の内容については報告されているが、研修参加者の期待や不安などの意識調査までは行われていない。

そこで、インストラクター候補者がインストラクター研修や実際の活動に対して、どのようなイメージや、期待、不安を持っているのかを明らかにし、長期的に活動を継続してもらうための研修やサポート体制についての検討を行うことを目的として調査を実施した。

2. フィリピンにおける中等教育日本語教育概要

2.1　フィリピンの中等教育日本語教育事情

フィリピンでは公立中等教育機関で、2009年から第二外国語教育が導入され、スペイン語、フランス語、日本語の授業が開始された。それに伴い、JFM は教育省からの支援要請を受け、中等教育での日本語教育支援を開始した。そして、2009年に19名で１期生の日本語教師養成研修が開始され、2021年に５期生の研修が完了した時点で日本語教師は110名、CJH 校は56校となっている。１期～４期まではマニラ首都圏及びセブ島の学校中心に日本語が導入されていたが、５期では北部・南部ルソン地域やセブ島以外のヴィサヤ地域、ダバオ市以外のミンダナオ地域にも導入され、実施地域が大幅に拡大した。

フィリピンの中等教育で使用されている教材は、JFM とフィリピンの大学などで活動しているフィリピン人日本語教師で構成された教材作成チームによって作成された独自教材『enTree - Halina! Be a NIHONGOJIN!! - 』（以下、『enTree』）である。『enTree』では、日本語学習を通じての人間教育や21世紀型スキル(2)の育成が目指されており、基本理念として「クラスメートを含む身近な人や、日本・フィリピンを含む世界の人々や文化・社会に興味・関心を向け、さらに自分とはいったいどのような人間であるのかという自分自身に対して関心を向けることで、自己認識を豊かなものにし、自ら学び、成長し、そして自己実現する力」（松井他 2013：4）の育成が設定されている。そのため、日本語だけでなく、英語・現地語も用いて行う発表やタスクが取り入れられ、日本語の文法などの言語知識に関する項目や、練習問題などは含まれていない。一方で、第二外国語教育開始から10年あまりが経過し、第二外国語教育に求められる役割にも変化が生じている。特に2020年に教育省により改訂されたカリキュラムが公開され、文法や語彙などの言語面に関する知識がより重視されるようになり、それに伴い教師自身も基本的な語彙や文法に対する理解を持つことが求められるようになってきている。

2.2　中等教育日本語教師養成研修

日本語教師養成研修は、２～３年の期間で公立学校の現職教員を日本語教師として養成する研修で、次のような特徴がある。（１）過去の日本語学習経験の有無を問わず、現職教員が研修に参加し、その後日本語担当教師となる。（２）日本語科目担当になっても、日本語科目専任となるわけではなく、元々担当していた科目の授業も継続して受け持つ。（３）教師研修は２、３年継続するが、最初の５週間の夏期集中研修が終わり次第、各自学校で日本語授業を開始し、集中研修以降も月１回程度の研修と日々の授業の実施が並行して行われている。

教授法パートは、『enTree』のトピックごとに、そのトピックの流れ、内容、目標、学習する日本語の語彙や表現等に関する説明（約４時間）を行い、続けて、日本語教師養成研修参加者（以下、研修生）が生徒役となる体験授業、教師役になりトピック内の一部を教える模擬授業（約２時間）が行われる。2019年に実施された５期生研修では、夏期集中研修で『enTree』のトピック10までを終了した。日本語パートは、『まるごと　日本のことばと文化　かつどう（入門 A1)』『まるごと　日本のことばと文化　りかい（入門 A1)』を使用し学習を行う[(3)]。日本語パートは主に国際交流基金から派遣されている日本語専門家（以下、JFM 専門家）により進められる。

研修生は日本語教師養成研修参加に際して、教育省から学校業務の一時的な免除が認められているが、インストラクターはこれに該当しない。学校の夏季休業中も新学期に向けた準備や式典、会議などがあり、インストラクターは所属校での業務と並行しながら講義や体験授業の準備をすることになる。そのため、５週間毎日出講することは難しく、業務負担を考慮すると、10名程度のインストラクターが必要とされている。

2.3　インストラクター研修

日本語教師養成研修の１期生、２期生の研修は JFM 専門家とフィリピンの大学で日本語を教えているフィリピン人教師が担当していた。その後、2015年に日本語教師養成研修の教授法パートを担当するインストラクター研修が初めて実施された。インストラクター研修の内容は主に『enTree』の理解、分析、インストラクターとしての研修生への指導、教授法パートの進め方や模擬授業である。2015年のインストラクター研修は、マニラの CJH 教師５名とフィリピン人日本語教師会の会員４名を対象に行われ、2016年にはセブの CJH 教師２名とヴィサヤ地域日本語教師会の会員５名に対して実施された。しかしながら、教師会の会員は、通常『enTree』を使って授業をしているわけではないので、インストラクターとしては定着しなかった。そこで、2019年に９名の CJH 教師（ルソン地域２名、ヴィサヤ地域７名）に対して研修を実施した。しかし、2022年４月時点でインストラクターとして業務を担っている CJH 教師は５名のみとなってしまった。そのため、2022年７月に開始される６期生の日本語教師養

成研修に際して、インストラクターが不足する状況となり、2022年４月にインストラクター研修を、CJH 教師10名（ルソン地域５名、ヴィサヤ地域５名）を対象に実施することになった。

インストラクター研修はオンラインでの講義と対面での模擬授業や発表を組み合わせた２日間で計画され、2022年４月30日にオンライン、５月14日に対面で行われた。

3. 調査方法

3.1　本調査の対象者

インタビュー調査は2022年４月30日に初日を迎えたインストラクター研修に先立って行われた。調査対象者は、インストラクター研修に参加する候補者10名の中から、居住地域が異なり、インタビューに際し比較的インターネット環境が安定している４名を選出した（表１）。調査対象者には調査目的やデータの使用方法を説明の上、調査データの利用に関する許諾を得て、録音し分析をした。

表１　調査対象者

ID	居住地 （所属機関所在地）	教授歴 （2022年４月時点）	主担当科目	インタビュー実施日	インタビュー言語
A	マニラ首都圏	２年10カ月	社会	2022年４月25日	英語
B	ルソン島南部	２年10カ月	理科	2022年４月25日	英語
C	セブ市郊外	２年10カ月	体育・芸術	2022年４月27日	英語
D	セブ島中部	２年10カ月	英語	2022年４月28日	英語

3.2　調査方法（PAC 分析）

本調査には PAC 分析を用いた。PAC とは、「Personal Attitude Construct（個人別態度構造）」のことであり、テーマに関する調査対象者の自由連想と連想間の類似度距離行列によるクラスター分析、そのクラスターに対する調査対象者のイメージや解釈を調査実施者と共に明らかにしていく手法である（内藤 2002）。PAC 分析では調査対象者による自由連想をクラスター化することで、内面構造や潜在的なイメージを外在化させることができる。そのため、候補者がインストラクター研修に期待していることやインストラクター業務に抱くイメージや不安、期待について、調査対象者自身も気づいていない潜在的意識を明らかにすることができると考えた。

3.3　調査手順

調査は内藤（2002）を参考に以下の①～⑥の流れで Zoom を用い、オンラインで実施した。

① 連想刺激文を提示し、画面共有した Google スプレッドシートに連想語を想起順に記入してもらう。提示した連想刺激文は以下の通りである。

Why do you participate in instructor training? What images do you have of instructors and upcoming instructor training? What are you looking for from the training?（日本語訳：どうしてあなたはインストラクター研修に参加しますか？インストラクター研修やインストラクター自体に対してどのようなイメージを持っていますか？インストラクター研修に何を期待していますか？）

② 連想語の横に重要度順位を記入してもらう。

③ 調査者が連想語を重要度順に並べ替え、調査対象者にそれぞれの連想語間の類似性を１～７で判断し記入してもう。

④ ③の結果により得られた類似度距離行列をもとに、統計ソフト SPSSver28[(4)]を使用し、階層的クラスター分析を行い、デンドログラムを抽出する。

⑤ 調査者がデンドログラムを「横断的に直線で切断」（内藤 2002：46）し、クラスター案を作成する。

⑥ 調査者が提示したクラスター案についての解釈インタビューを行いながら調査者と調査対象者でクラスターをまとめ命名する。提示したクラスター案が調査対象者のイメージや解釈と合わない場合は、調査対象者の意見をもとに柔軟にクラスターをまとめ直す。

4. PAC 分析結果

本稿では、連想語やキーワードとなる言葉は調査対象者が記入した英語のまま記載し、インタビュー回答内容については筆者が日本語訳したものを掲載する。また、４名のデンドログラム図の左側にある数字は各連想語の重要度順を示しており、クラスター名の後ろには調査対象者が持つ各クラスターへのイメージに関して、ポジティブなイメージのものは（＋）、ネガティブなイメージのものは（－）と記載した。

4.1　Aさんのデンドログラムの解釈

Aさんが記入した連想語は10で、インタビューの結果、３つのクラスターが認められた（図１）。１つ目のクラスターは４つの連想語から形成され（図１）、Aさんはこのクラスターに「My goal for professional」と命名した。Aさんはこのクラスターについて「*これは私にとってハードなタスク。でも克服したい。だから今はネガティブなマインドセットよりポジティブなマインドセット。*」と語っており、インストラクターとして活動する上で出てくるであろう課題に前向きに取り組もうという意識があり、「Many demo lectures」「Prepare for planning and schedule to avoid conflict of schedule」などの連想語をうまくコントロールして行くことが、「My goal for professional」であり、Aさんにとっての理想であることが分かる。

2つ目のクラスターは2つの連想語から構成され「Mission」と命名された。「*私にとって前向きな環境はとても大切。前向きな学習環境は先生たち（研修生）を前向きな態度にさせる。そしたら研修生はさらに深く学べ、私をさらによい先生にしてくれる。*」と述べている。一方で、Aさんはこのクラスターに対してネガティブなイメージを持っているとも語った。「*ネガティブな印象です。研修生がいつも前向きな環境にいられるようにするのはとてもハードでチャレンジだと思う。他の人と対峙しないといけないから。*」「*私は先輩がしていたようないい態度をとれるようになれるか分からない、これが私の心配事です。*」と語っており、研修生にとってよい環境を作ることが、インストラクターのMissionであると思うと同時に、それを達成できるか不安を感じていることが分かる。

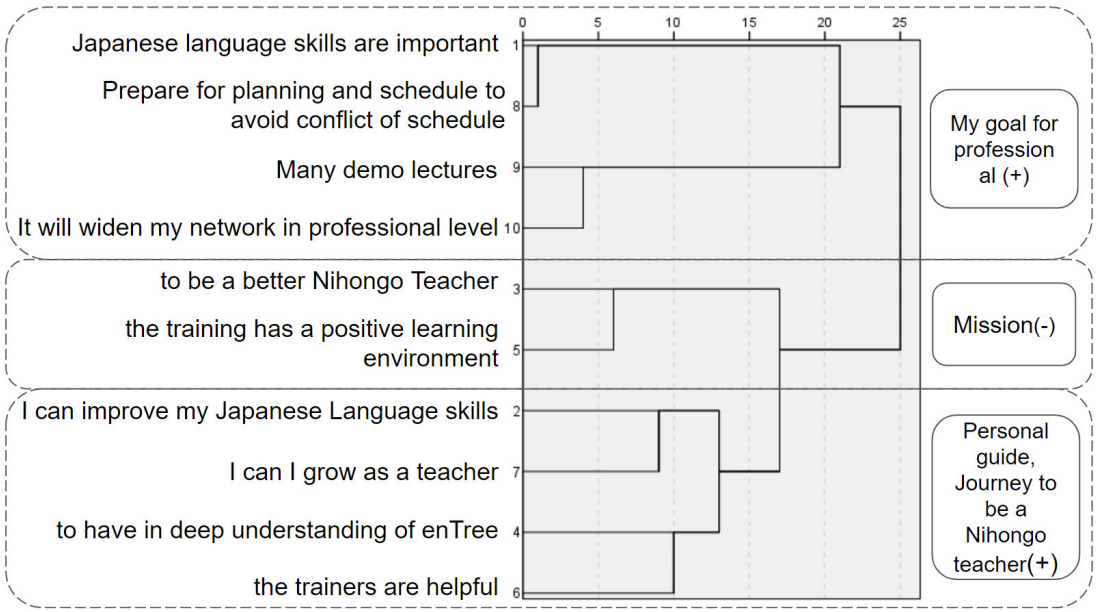

図1　Aさんのデンドログラム

3つ目のクラスターは4つの連想語から「Personal guide, Journey to be a Nihongo teacher」と命名され、「*私の将来です、私自身の展望です。*」と語られた。このクラスターに含まれる「I can improve my Japanese Language skills」「I can I grow as a teacher」「to have in deep understanding of enTree」などの連想語は、インストラクター研修やインストラクターになることを通しての将来像であり、Aさんの期待が表れている。

4.2　Bさんのデンドログラムの解釈

Bさんが記入した連想語は19で、インタビューの結果、3つのクラスターに分類され、1項目はどのクラスターにも属さないと判定された（図2）。1つ目のクラスターは8つの連想語

から構成され、Ｂさんはこのクラスターに「New ideas and knowledge」と命名した。Ｂさんは「*インストラクター研修に参加することは自分自身の向上になる、新しい知識を学びたい*」と述べ、連想語「To be able to share my knowledge to other batches appropriately」「Provides adequate knowledge for the training」「Knowledgeable」などはＢさんにとっての理想のインストラクター像であり、インストラクター研修や業務を通して新しい知識を得ていきたいとの期待が表れている。

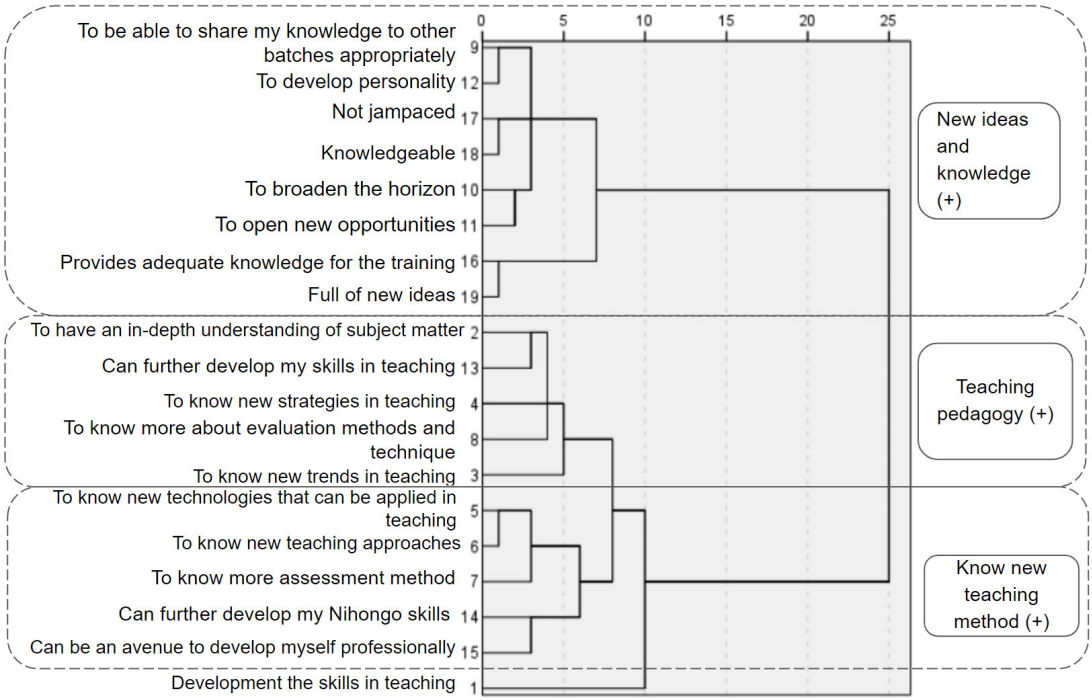

図２　Ｂさんのデンドログラム

２つ目のクラスターは「Teaching pedagogy」と命名し、Ｂさんはこれらの連想語を「*研修で扱う教授法やテクニックが含まれているから。教育的な観点、どうやって教えるかが含まれている。*」と説明した。また、３つ目のクラスターは「Teaching pedagogy」に似ているが、もっと「*教授法のテクノロジー、アプリケーション、アプローチが強調されている*」とし、「Know new teaching method」と命名された。これら２つのクラスターにはインストラクターとして活動していく上で手に入れたい具体的なスキルが表れている。そして、どのクラスターにも属さなかった連想語「Development the skills in teaching」はそれらの上位項目になり、その下にある具体的スキルが「Teaching pedagogy」クラスターと、「Know new teaching method」クラスターに表されていると語った。

Ｂさんは19全ての連想語、３つのクラスターにポジティブなイメージを持っており、「*視野*

を広げたい、自分の教授法スキルを向上させたい、どうやって日本語トレーニングを実施するのか学びたい」ので、インストラクター研修に参加することは自分にとって自己成長のための挑戦であり、何事についてもネガティブなイメージを持たないようにしていると説明した。

4.3　Cさんのデンドログラムの解釈

Cさんが記入した連想語は10で、インタビューの結果、4つのクラスターが認められた（図3）。1つ目のクラスターは2つの連想語で構成され「Learning Japanese」と命名された。2つ目は3つの連想語で「Social」クラスター、3つ目は2つの連想語で「Teaching Japanese」クラスター、4つ目は3つの連想語で「Face to face」クラスターと命名された。

「Learning Japanese」「Teaching Japanese」クラスターは自身がインストラクター研修に参加し、インストラクターとして活動していく上で手に入れたいスキルが表れている。「Social」クラスターについては、研修の環境や研修生とのやり取りに関わるものであり、自身の能力ではなく他者との関わりに関連するイメージの連想語が集まっていることから命名された。また、この「Social」については自身が研修生だった時を振り返り、「*研修生は、私が研修生だった時と同じように私たちに期待をすると思う。私はそこにとてもナーバスになっている*」と期待と共に緊張感も抱えている心情が語られた。最後の「Face to face」クラスターについては、自身が研修生だった時に新型コロナウイルスの影響で研修が途中でオンライン化されてしまい、期待する成果が得られなかったという経験に起因している。Cさんがインストラクター研修やインストラクターとしての活動が対面で行われることを強く望んでいることが分かる。

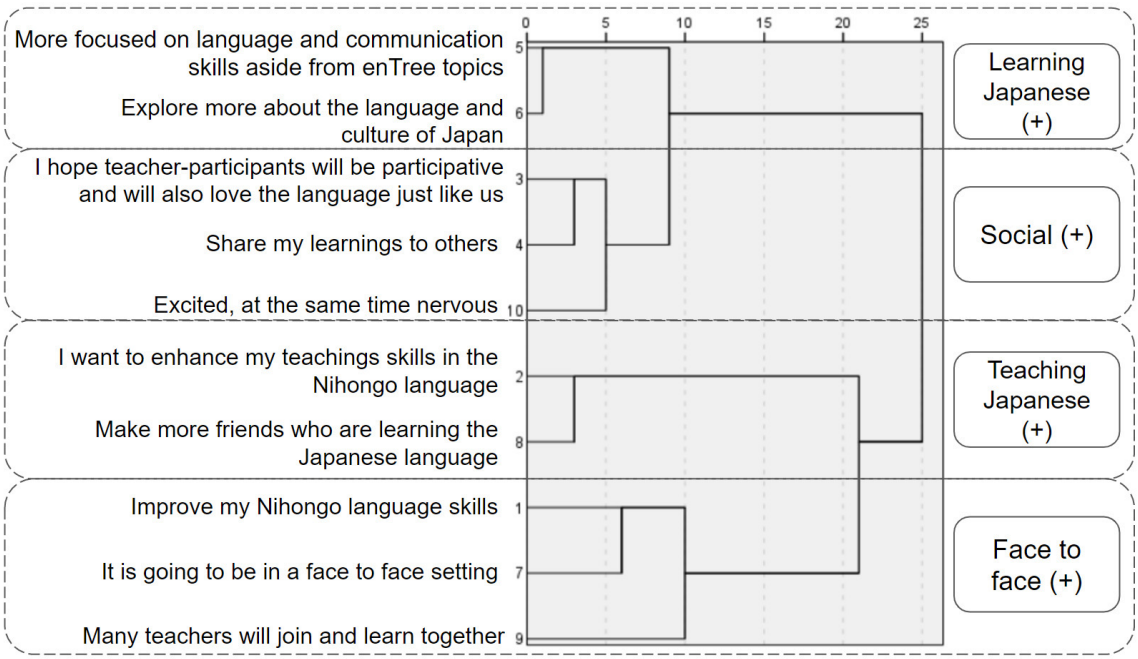

図3　Cさんのデンドログラム

4.4　Dさんのデンドログラムの解釈

Dさんが記入した連想語は10で、インタビューの結果、3つのクラスターが認められた（図4）。1つ目のクラスターは3つの連想語で構成され「My expectation」と命名された。2つ目は3つの連想語で「Fear and excitement」、3つ目は4つの連想語で「Expected out come」と命名された。

Dさんは、「My expectation」クラスターについて、「*挑戦する時は単なるポジティブじゃない（中略）挑戦とタイムマネジメントはとても関連している。挑戦する時は時間を管理しないといけない、特に夏休みの期間は。Expectation はポジティブでもありネガティブでもある*」と述べ、新しいことに挑戦することには前向きだが、所属校での業務や子育てと並行して、インストラクターになることは時間の調整が難しく、それらを両立させていくことが自分にとっての挑戦であると考えている。「Fear and excitement」クラスターについては、「教師に教えること」に関して特に不安を抱いていると語った。多くの疑問や期待を抱いているであろう研修生に自分が対応することができるのかと技術や知識面で不安があると述べた。「Expected out come」クラスターは、Dさんにとってインストラクター研修や活動を通して、到達したいことであり、自分の日本語力や日本語教授法能力、教材への理解を深められると期待している。

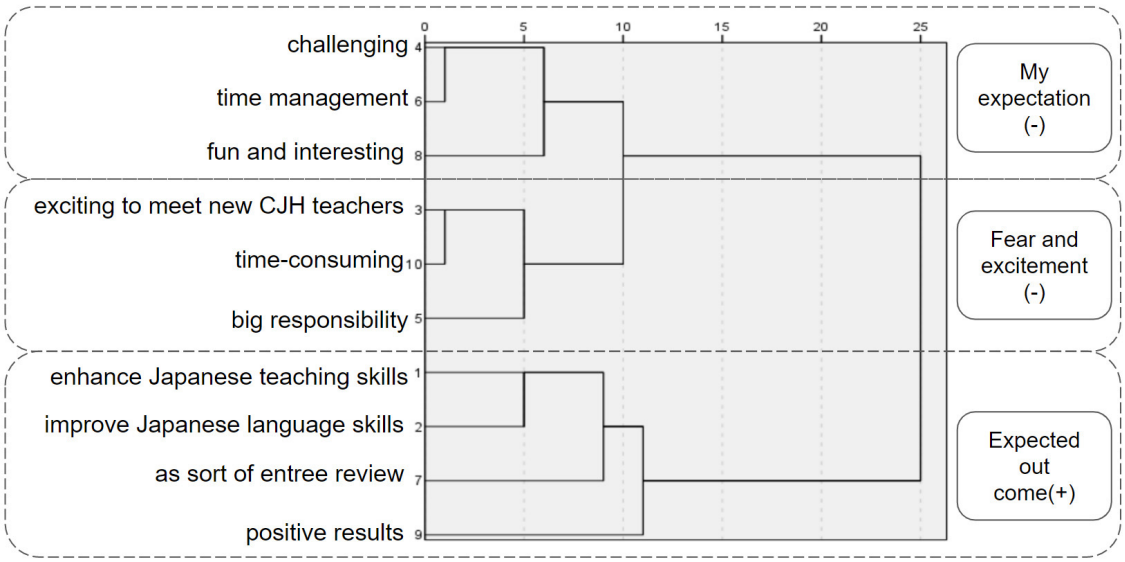

図4　Dさんのデンドログラム

4.5　4名の結果からの考察

4名のPAC分析により得られたクラスターをそれぞれ比較したところ、インストラクター研修に参加すること、インストラクターとして活動することに対して持っているイメージは2つに分けることができた（図5）。1つ目は4名全員に共通し「自分自身の能力向上・スキル

アップ」に関わることで、日本語力だけでなく、日本語教授力、使用教材に対する知識や専門的な知識を獲得することへの期待である。２つ目は、「インストラクターとしての責任」に関することで、生徒ではなく教師に教えることやインストラクターとしての研修生との関わり方など普段の学校での業務とは異なることへ挑戦することに対しての期待と不安である。また、クラスターに属さなかったＢさんの連想語「Development the skills in teaching」は、Ｂさんの語りから「Teaching pedagogy」「Know new teaching method」クラスターの上位にあるイメージであるとされたので、「自分自身の能力向上・スキルアップ」に含まれると解釈した。

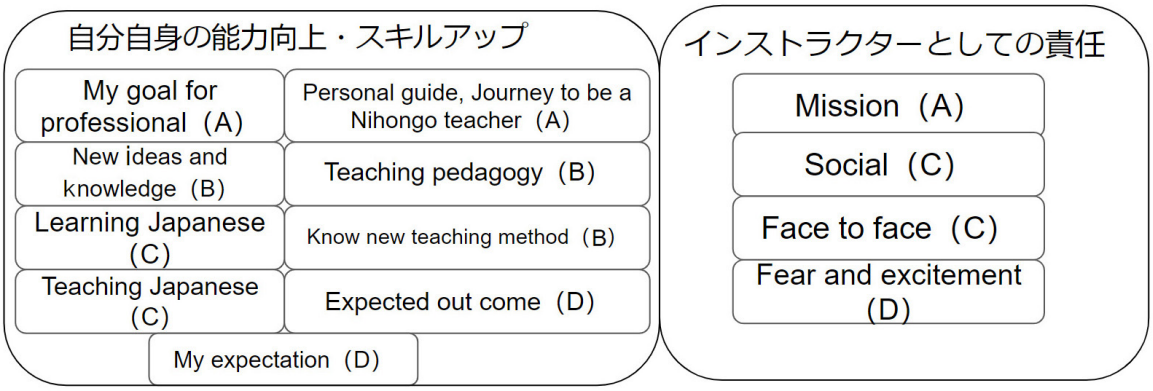

図５　各クラスターの分類

ＡさんＣさんＤさんの３名に対し、Ｂさんのクラスターは「自分自身の能力向上・スキルアップ」に関わる項目のみである。Ａさんは「Mission」クラスターに対して、Ｄさんは「My expectation」「Fear and excitement」クラスターに対して、ネガティブな印象を持っていると語った。一方で、Ｃさんは、「Excited, at the same time nervous」という連想語はあるが、「*研修生は私に期待をすると思う。私はそこにとてもナーバスになっている、（中略）私はもっと勉強したい、そして勉強したことをみんなにシェアしたい、これについてはとてもポジティブです。*」と述べており大きな不安はないと語っている。Ｂさんはインストラクター研修に参加することやインストラクターとして活動することに関して、「*新しいことに挑戦することは自己成長にとって重要なこと*」と語り、調査時点では「自分自身の能力向上・スキルアップ」を重視しており、不安はないと語っている。この点については調査対象者全員が共通して持っている意識ではなく、個人の性格や考え方によって違いが生まれる結果となった。Ｂさんは「*なんでもネガティブではなく、ポジティブに考えるようにしている*」、Ｃさんは「*インストラクターとして選んでもらえて、私を信頼してくれて、とてもうれしい。私はインストラクターとしてベストを尽くすだけなので心配事はない*」と話すなど、責任や不安を感じていないというよりは、個人の性格的な要因から、新しいことに取り組む際のものの捉え方による違いが

生じていると考えられる。これらのことから、インストラクター研修参加に際しては、実際の活動にまで目を向けて責任や不安を感じている人と、研修参加という自分にとっての新しい挑戦に重点を置いている人がいることが分かった。

5. 本報告のまとめ

5.1 インストラクターに対する継続的支援への提言

調査対象者の4名は全員インストラクター研修参加やインストラクターとしての活動を通しての「自分自身の能力向上・スキルアップ」を期待していた。インストラクターとしての活動が自分自身の成長を感じられるようなものであれば、モチベーションを高く維持していける可能性が高いと考えられる。今後JFMでは、インストラクターの日本語力向上を目指した研修を予定しているが、その他にも、日本語力の向上が認められる場合は日本語パートを担当したり、6期生以外も対象とした研修会やセミナーでの講師を依頼したりするなどのインストラクターとしてのキャリアプランを設定し、必要に応じてスキルアップの研修を行うなどが考えられる。

また、「インストラクターとしての責任」を感じている人に関しては、特に、今回の調査で「自分たちが研修生だった時のインストラクターのように自分が振舞えるか」と不安を感じていることが分かった。そのため、先輩インストラクターを含めた事前準備や講義のリハーサルの実施が不安を解消するために有効だと考えられる。一方で、年間を通して多忙なインストラクターに時間的負担をかけないようにする工夫も必要であることが分かった。

5.2 今後の課題

今回の調査では、候補者がインストラクター研修やインストラクターに対して持っているイメージや期待、不安を知ることができた。一方で、実際にインストラクターとして活動を始めてから、さらに達成感を感じたり、反対に不安や負担を感じたりする出来事が起こる可能性がある。そのため、インストラクターとしての長期的な活動をサポートするためには、時期や情勢に応じた定期的な調査や分析を継続していくことが重要である。

また、多忙や転職、結婚などの状況や環境の変化によりインストラクターとしての活動を休止せざるを得ない事態は今後も継続して発生すると考えられる。そのため、一度業務から離れたインストラクターが復帰しやすい環境を作り、休止期間が長いインストラクターに対するフォローアップ研修などの実施を検討すれば、さらに多くのインストラクターが継続して活動することが可能になると考える。

〔注〕

(1) 本稿では第二外国語として日本語教育を実施している公立中等教育機関をCJH校、そこで日本語授業を担当している日本語教師をCJH教師と表記する。
(2) Assessment & Teaching of 21st Century Skillsにより提唱された次世代を生きるために必要なスキル。具体的には、「創造性とイノベーション」「批判的思考、問題解決、意思決定」「学び方の学習、メタ認知」「コミュニケーション」「コラボレーション」「情報リテラシー」「ICTリテラシー」「シチズンシップ」「人生とキャリア発達」「個人の責任と社会的責任」があげられる（P.グリフィン他 2014）。
(3) 日本語能力試験にも対応できるように時期に応じて文型や語彙を抽出した教材を作成し使用することもある。
(4) 参照サイト＜https://www.ibm.com/products/spss-statistics＞（2022年11月20日）

〔参考文献〕

Evi Lusiana・尾崎裕子・秋山佳世（2013）「インドネシアの中等教育における日本語教師研修インストラクターの養成－教育文化省語学教員研修所と高校日本語教師の連携による研修の自立化を目指して－」『国際交流基金日本語教育紀要』 9 、43-58
国際交流基金（2013）『まるごと　日本のことばと文化　かつどう』（入門　A1）、三修社
国際交流基金（2013）『まるごと　日本のことばと文化　りかい』（入門　A1）、三修社
内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門［改訂版］「個」を科学する新技法への招待』、ナカニシヤ出版
西谷まり（2013）「外国人日本語教師不安尺度の開発」『一橋大学国際教育センター紀要』 4 、3-13
布施悠子（2020）「初任日本語教師の教育不安の変容についての一考察－養成講座修了時から2年目終了時までの縦断的インタビューから－」『一橋日本語教育研究』 8 、53-66
松井孝浩・大舩ちさと・和栗夏海・須摩亜由子（2013）「アイデンティティ形成を支える日本語学習活動の実際 －フィリピン中等教育機関向け教材『enTree-Halina! Be a NIHONGOJIN!!-』の学習活動から－」『国際交流基金日本語教育紀要』 9 、25-42
P.グリフィン・B.マクゴー・E.ケア（2014）『21世紀型スキル　学びと評価の新たなかたち』、三宅なほみ（監訳）、益川弘如・望月俊男（編訳）、北大路書房
Florinda A. A. Palma Gil, Bernadette S. Hieida, Alice Mary L. Itchon, Chisato Ofune, Francesca M. Ventura, Junilo S. Espiritu, Natsumi Waguri, Ria Rafael Roelia Alvarez, Kozue Takasu, Sachiko Kuwano, Alexander Macainag, Mamoru Morita, Adviser: Kaoru Fujinaga（2016）. *enTree-Halina! Be a NIHONGOJIN!!- ver. 2016*, Manila: The Japan Foundation, Manila.